

各駅停車・大分県歴史散歩

ふるさと駅

(9) 佐伯・宗太郎

初版：2007年4月27日

③7 浅海井

名勝の町－“海の耶馬溪”



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に連載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながら読みいただきお楽しみください。

◀ 上浦町のシンボル－豊後二見の景

■ 90%が山地の町

駅を出るとすぐに国道 217 号線。海の香が押し寄せてくる。背後は県南の名峰の一つである彦岳（639 メートル）。左手には四浦半島が延びている。

彦岳の東斜面と四浦半島の南斜面が海に落ちるところは急斜となり、いたるところに断崖があるが、ところどころに極めて狭い平地もみられる。そこに浅海井浦はじめ津井浦、最勝海浦などの集落があり、上浦町を構成している。リアス海岸特有の地形で、町の面積はわずか 15.8 平方キロ。大分県下の市町村の中では、離れ島の姫島村に次いで小さい自治体。しかも、その 90% が山地である。

その代わり、海は広い。かつて佐伯藩では俗に“九十九浦”といわれるたくさんの海村を上浦、中浦、下浦の三浦に分けて統治していたが、その上浦の名を引き継いでいるのがこの町である。風景もよく、特に最勝海浦の海岸断崖や半島先端部の蒲戸崎あたりは“海の耶馬溪”と言われている。

■ 海の名勝が続く

駅のすぐ裏に小公園があり、暁嵐の滝と滝神社が

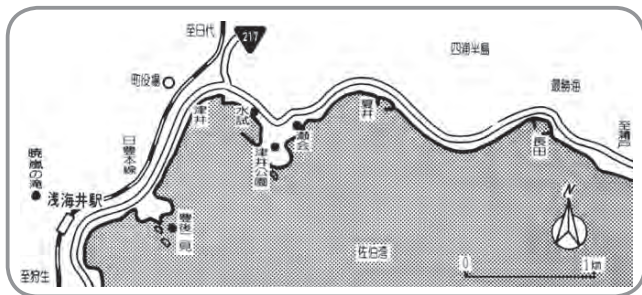
ある。滝は高さ 15 メートルほどで小さいが、海岸近くにこのような瀑布（ばくふ）があるのは珍しい。秩父古生層の堅い

チャートをえぐっており、古くから名勝とたたえられた。二十三夜踊りや相撲などが 8 月に催されるが、これは滝にちなむカッパ伝説による。

滝の周辺にはウバメガシが茂り、巨石も点在して庭園風。その一角に樹齢 400 年をこすというアコウ樹が岩壁にへばりついている。幹や根が入り組み、からみあい、俗にタコの木という亜熱帯樹。そういえば、上浦町は温かい無霜地帯である。

駅前の国道を左に進むと、すぐに豊後二見の景。伊勢の二見浦に似た夫婦岩の間に、長さ 65 メートルのシメ縄がかかり、海の町のシンボルとなっている。

やがて津井浦。津久見からの津井峠が下りてきたところで、町の中心地。ここから半島部にかかるが、



浅海井駅開業：大正 5
(1916) 年 10 月 25 日

その入り口にあって、小さく海に突き出しているのが桜と海景が名物の津井公園。東側の浜に瀬会神社があり、砂浜は海水浴場となっている。

■農漁業の不振

津井浦には瀬戸内海栽培漁業センターと県水産試験場がある。半農半漁のこの町が置かれている環境は厳しい。山がちのため田畑は少なく、農業は山を利用したミカン栽培が注目されるようになってきたが、漁業も沿岸漁業の不振からなんとか脱出しようと、養殖漁業への転換が進められている。その支援をしているのがセンターや試験場である。

農漁業の不振は、この町を過疎化した。かつて町の人口は次第にふえ、昭和 35（1960）年には 6500 人近かった。だが、高度経済成長と反比例して、そのころから人口の流出が始まった。同 40（1965）年まで 5 年間の減少率はなんと 22.3% を示した。

出稼ぎもまた多い。昭和 46（1971）年の統計では出稼ぎ率は 65.2% という、びっくりするような数である。2 世帯に 1 人強という割合で、特に土木

建築関係に出稼ぎに行く。これは大分県南に共通の現象で、昔から「豊後土工」とまでいわれたものである。現在、人口およそ 4000 人。過疎化を食い止め、新しい産業でいかに発展させるか、町がかかえている課題はたいへん大きい。

■断崖の下に道路

“海の耶馬溪”は断崖の下に海岸道路がついている。夏井、長田、福泊、蒲戸と続き蒲戸崎まで。このうち、蒲戸はいまカマトと読んでいるが、昔はホトと言ったらしい。津久見駅のさい紹介した穂門の名残である。そして最勝海浦の名もまた『豊後風土記』の記述に由来する。最勝海藻をホツメと読んだのは、風土記に「保都米」という読解がついているためだが、実はある本が、これを書写の段階で「你那米」と誤写した。それがかなり流布したのである。

最勝海浦は前記の 4 集落が明治 8（1875）年に合併したとき、新たに名付けたもので、そのとき穂門にゆかりの名を選ぼうとして取り上げたのが誤写本だったらしい。おかげで最勝海がニイナメという難読地名になってしまった。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等
(駅からのおよその距離)

◇暁嵐の滝（0.5 キロ）

◇豊後二見（1 キロ）

◇県水産試験場（2.5 キロ）

◇瀬会海水浴場（3 キロ）

◇最勝海海岸（蒲戸まで 10 キロ。途中の福泊近くの海に三ツ石の景。蒲戸と、さらに 2 キロほど行った大浜にそれぞれ海水浴場。蒲戸崎の先端までは陸路が通じていない）

③ 狩生・海崎

狩生鍾乳洞と彦岳

狩生駅開業：昭和 34
(1959) 年 4 月 15 日

海崎駅開業：大正 12
(1923) 年 7 月 1 日

■ 貴重な洞内の動物

狩生、海崎はすでに佐伯市である。車窓に豊後水道を見てきた日豊本線の旅も、ここで海の見おさめ。鉄道は佐伯市から山間部に入って行き、宮崎県の海岸部に出るまでは海を離れて走ることになる。

狩生は目と鼻の先に彦島を見る海岸の農業地帯で、水田とミカンが主力である。近くの二栄、護江などは海岸集落だが、狩生の村は海岸から少し入って小さな狩生川ぞいの山つきに点在している。

その川をさかのぼると狩生鍾乳洞がある。大分の代表的な鍾乳洞の一つで昭和 9 (1934) 年、国の天然記念物に指定され、新洞は同 51 (1976) 年に県指定された。

特徴的なのは、洞内にいる小動物。ガロアムシ類、アリズカムシ類、メクラチビゴミムシ類など約 40 種の節足動物がおり、大部分は体長数ミリ。コウモリの糞 (ふん) を食物として生活している。これも

◀ みごとなドーム形の彦岳



便利のよさだった。昭和元年にさっそく日本セメントの工場が戸穴の海岸に進出したのをはじめ、海崎海岸には合板工場も立地した。駅付近では、西側の車窓に農業地帯、東側の車窓に工業地帯を見ていくことになる。

■「神の井」の大入島

狩生、海崎両駅を走るあたりで、狭い水域をはさんで海中に長く連なって見えるのが大入島である。島に渡るのは佐伯駅近くの港から1日8便のフェリーを利用するが、ここで紹介しておこう。

島は面積5.7平方キロ。姫島に次いで二番目に大きく、真ん中がくびれて北と南に分けられる。海岸線に10余の小集落があり、ミカンと漁を中心に人口およそ2500人。

ここにも神武天皇伝説がある。東征のおり、この島に上陸したが水がない。そこで天皇が弓で海浜の砂を掘ったところ、たちまち清水がわき出したという。これを「神の井」といい、かつて軍港・佐伯に入った海軍の将兵がよく参拝したものである。

明治44（1911）年には、当時まだ皇太子だった

大正天皇が訪れ、佐伯湾をながめるため石間浦の丘に登られたこともある。そこに駐蹕碑（ちゅうひつひ）が建てられ、桜の名所とあって訪れる人が多い。

白浜には佐伯市でただ一つの海水浴場があるほか、シーズンには島を一周する観光船も出る。 

<メモ>

周囲にある名所旧跡等（駅からのおよその距離）

◇狩生鍾乳洞（狩生駅から2.5キロ）

◇大手洗の滝（同4キロ。鍾乳洞の少し上まで林道。あとはこれとわかれて徒歩）

◇彦岳（同5.5キロ。大手洗滝から尾根道となる）

◇大宮八幡（旧8月14日から五丁の市がある。多くの漁船が集まり、ジョウヤラ踊りが勇壮。海崎駅から1キロ）

③⑨ 佐伯・上岡①

山際に残る武家屋敷

佐伯駅開業：大正 5
(1916) 年 10 月 25 日

上岡駅開業：大正 9
(1920) 年 11 月 20 日



◀ 養賢寺と城山

■文豪・独歩と城山

佐伯の市街地は番匠川のデルタにある。川が町を生んだ母とするなら、町に君臨する城山は父といってもよからう。城山は佐伯のシンボルである。

佐伯駅に下車すると、ホームに次のような文が掲げられている。

「佐伯の春先づ城山に來り、夏先づ城山に來り、秋又早く城山に來り、冬はうそ寒き風の音を先づ城山の林にきく也。城山寂たる時、佐伯寂たり。城山鳴る時、佐伯鳴る。佐伯は城山のものなればなり」

これは文豪・国木田独歩の『豊後の国佐伯』の一節である。彼は明治26（1893）年、佐伯の私塾「鶴谷学館」の教師として23歳で赴任した。

小説『源叔父』に「都より一人の年若き教師下り來りて佐伯の子弟に語学教ふこと殆ど一年、秋の中頃來りて夏の中頃去りぬ」とあるように、その佐伯滞在は短かった。自由人としての独歩の行動が、城下町佐伯の人々との間に軋轢（あつれき）を生んだためである。

しかし、その1年間、彼は佐伯の山、川、海を歩き回り、自然に親しみ人を観察した。なかでも、彼

が最も愛したのが城山であり、名作『春の鳥』の舞台もこの山である。城山は標高144メートル。頂上の一角、町と海を見おろすところに独歩碑、ふもとの公園に文学碑が建ち、下宿していた坂本邸は部屋も昔のまま山際通りに残る。

■毛利氏の城下町建設

城山に佐伯城（鶴ヶ城、鶴屋城）を築き、城下町をつくったのは慶長6（1601）年に2万石で入封した毛利高政である。入部当初はそれまで佐伯氏がいた梶牟礼城を使ったが、すぐに八幡山と呼ばれていた現在の城山を城地、そのふもとの塩屋村を城下町に選び工事にかかった。

城下は番匠川の本流を外堀とし、そのデルタの複雑な水流を整備、たくみに生かして防衛線を張ったほか、街路の曲折にも工夫がこらされた。町としての体裁が十分に整ったのは少し時代が下がるが、その範囲は現在も地名が残る大手前あたりを中心にした現市街地の南部一帯。

武士、商人の町も定め、いまでも山際には昔をしのばせる武家屋敷が残り、町人町はいまの商店街とほ

ぼ同じ場所である。また、川に面したところに船着
 き場をつくって船頭町とし、河岸の石垣も二段に積
 んで港を固めると同時に、番匠川の洪水に備えた。

■昔をしのぶ櫓門

城は山頂に構えられ、いまでも石垣が立派に残っている。鶴ヶ城と呼ばれるように南北に翼を広げたようで、中央よりやや北の佐伯湾を見はるかすところに本丸、その南に二ノ丸、西ノ丸、北に北ノ丸が置かれた。天守は三層だったという。

しかし、山上の城は戦いのさいには防衛面で都合

がよくても、太平の世に政務をとるにはなにかと不便。そこで寛永14（1637）年になってふもとに三ノ丸を構え、以後ここが政庁となった。

現在、三ノ丸の跡には市立佐伯文化会館が建っており、入り口に「黒門」と呼ばれる櫓門が創建当時のまま残って県文化財に指定されている。

ここから本丸跡までは山腹に昔ながらの道がついており、深い樹林の中を行く。朝の散歩や健康づくりのため、毎日登る市民もいる。三ノ丸跡から山すそを佐伯駅方面へ向かっているのが山際通りで、毛利氏歴代の墓所がある養賢寺まで続いている。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等
(駅からのおよその距離)

◇城山（佐伯駅から3.5
キロ。三ノ丸跡から山道）

◇三ノ丸跡 (同 2.5 キ口)

◇養賢寺 (同2キ口)

◇白潟遺跡（同3キ口。
近くの若宮社拝殿に出土
品を展示）

◇下城遺跡(同5.5キ口)

◇大入島（港まで同1キロ、船30分）

◇一三重塔（鎌倉末期。
佐伯氏ゆかりの石塔。上
岡駅から0.8キロ）

④ 佐伯・上岡⑤

県南部の中核都市



◀ 軍港から日本有数の外材
輸入港になった佐伯港

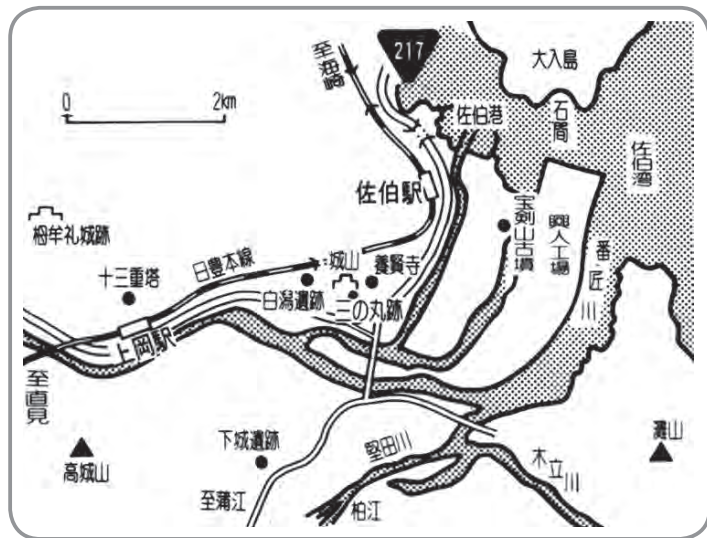
■市街地の北進

佐伯駅のある市街地北部が発展してくるのは明治時代からで、交通事情の近代化によるところが大きい。

その一つは佐伯港（葛港）が明治 16（1883）年に開港したことである。それまでは旧藩の船着き場が船頭町にあったほか、中継港として番匠川の城下の対岸に灘港、大入島に石間港、さらに堅田川の柏江に幕府の港があったが、船頭町に大きな船がつかないため不便なもの。参勤交代の藩主でさえ、いったん小舟に乗って灘まで行き、大船に移乗するありさまだった。

それだけに、市街と直結する新港の開設は大いに歓迎された。大きな船がつけるうえ、目の前に天然の防波堤となる大入島もある。そうした条件のよさから急激に利用者がふえ、明治後半には大阪、宇和島などから汽船が日に何隻も寄港するほどになった。

これに伴って市街も次第に北進を始めたが、それに輪をかけたのが大正 5（1916）年の佐伯駅開業だった。駅は家屋の密集する旧城下まで入らず、港との連絡も考えてか、北部につくられたのである。



あわせて、各方面への道路網の整備もはかられ、佐伯は水陸の交通の要衝となっていった。

■古代を伝える郊外

河口部が市街化していくのに対し、逆の城山の西のふもと一帯、つまり上岡駅周辺、さらに番匠川を渡って堅田、木立方面の変化は小さい。各種工場や

住宅団地の進出などが見られるものの、一部を除いて農業地帯である。

ここに、佐伯の古代を語る遺跡がある。縄文・弥生時代の下城、長良、白潟などの住居跡、貝塚がそれ。当時、デルタの発達はまだ十分でなく、かなり奥まで海が入り込んでいた。いたるところに低湿地が広がり、人々は丘陵の端などに居を構えていた。それがこれらの遺跡である。

下城遺跡は昭和 23（1948）年に発掘調査され、そのさい出土した土器に「下城式」の名が与えられた。この土器形式は東九州一帯に広く分布するもので、弥生前、中期のモデル的存在となっているものである。また、三遺跡からはいずれも鉄滓が出土し、原始の“製鉄工場”の存在を推測させるし、下城、白潟では貝塚を伴う住居跡もあった。その住居が白潟で復元され見学者を待っているが、こうしたことから、弥生中期にはかなりまとまった集落が営まれていたと考えてもよからう。

■海に生きる男たち

だが、古墳時代に入ると、河口部の長島にある宝

剣山、大入島の東島の両古墳以外にみるべき古墳は少なく、同じ豊後水道域にありながら臼杵地方に比べると文化の展開は十分ではなかったようだ。しかし、宝剣山から出た三角板鋳留短甲は九州で数例しかなく、畿内地方で作られたものらしい。

とすると、なんらかの形で中央勢力と関係をもった海部族が、佐伯湾でも活躍していたと思える。宝剣山はデルタの独立丘にあり、当時は小島だったろうし、東島もまた大入島に付属する小島にある。いてみれば、それは“海の中の墓”。古代海人の首長が眠る場所にふさわしいともいえよう。

律令時代にこのあたりも海部郡穂門郷に属していたであろうことはすでに述べたが、佐伯の名が歴史に登場してくるのは佐伯院という官倉が置かれたことである。場所ははっきりしない。

そして天慶 4（941）年、藤原純友の乱が起きた。これに呼応して、次将として参加したのが佐伯是基である。日向を襲って捕まったが、彼もまた、海に生きた男だったろう。その後に登場してくる大神系佐伯氏や梶牟礼城のことについては「バス路線」の章でふれたい。

■軍港から工業都市へ

現在、佐伯市は時代の大波に洗われている。それは工業都市化が引き起こしたもののだが、その前にも軍事基地化という大波をかぶっている。佐伯が水陸の要衝であり、豊後水道の関門に位置するためである。

この国防上の要地に目をつけた日本海軍は昭和9（1934）年、まずここに航空隊、次いで15（1940）年に防備隊を置いた。これとあわせて佐伯湾口の鶴見崎先端部や豊予海峡の高島に砲台が建設され「豊予要塞」と呼ばれるようになる。その中枢となったのが佐伯で、佐伯港は次第に軍港の性格を強めて行き、基地の町となっていった。このため第二次大戦も押しつまった20（1945）年4月、米軍の無差別爆撃を受けて46人の死者を出した。

戦後、その痛手から立ち直って、航空隊の跡には興人佐伯工場などが進出、戦前に徐々に進んでいた各種工場の立地とあわせて、デルタを中心に佐伯は工業都市としての道を歩いた。主力となったのはパルプ、合板、造船、セメントなどであり、佐伯港は日本有数の外材輸入港ともなった。広い海面貯木場

が独特の風景をみせた。

だが、それは“企業城下町”の色彩をおびることにもつながった。それだけに好況時はよいが不況に弱い。高度経済成長が終わるとともに、倒産、人員整理の波が打ち寄せ、一時は「灯が消えたような町」とさえいわれた。

いま佐伯は市勢発展の新しい青写真のもとに努力を続けている。県南部の中核都市として、まさに正念場に立たされた昨今である。



④ 直見・直川

90%を山林が占める

直見・直川駅開業：大正
9（1920）年11月20日



◀ 各地区に点在する中世の
石塔群（釈迦堂石塔群）

■キリシタンがいた

佐伯市から番匠川鉄橋を渡ると弥生町。少し走ってトンネルを抜けると直川村である。すぐに直見駅。線路はここから番匠川の支流、久留須川ぞいに直川駅を通り宗太郎峠にかかる。

直川村は久留須川の流域に開けた村である。久留須はキリシタンの十字架（クルス）に由来するのではないかという。大分県下には、このほか久留芝などという地名が二、三カ所ある。これも十字架を建てて祈ったクルス場だったらしい。

それを裏付けるように、久留須川のほとり水口にはキリシタン墓、肘切神社にはキリシタン灯籠などがみられ、信者がかなりいたらしい。

地名のついでにいえば、直川村は昭和 26(1951)年に直見村と川原木村が合併して成立、そのとき両村の一字ずつをとって新村名とした。

その川原木村というのも、明治 22(1889) 年に横川、仁田原、赤木の三村が一緒になったときの合併名である。なお、直川駅は神原(ごうのはる)駅といっていたのを新村名にあうよう昭和 36 (1961) 年に改称した。

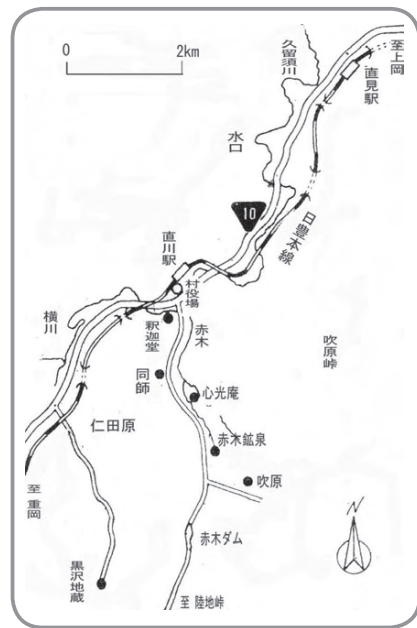
■村が戦場と化す

直川駅前に小さな商店街がある程度で、純粋な農山村と言ってよく、列車で通る人も、それと並行する国道10号線を行く人も、山がちなところだと感ずるくらいで、なんとなく過ぎてしまう村かもしれない

しかしこの地は、鉄道や国道が通っていることからわかるように、古くから大分と宮崎を結ぶ交通動脈の位置にあり、かつて陸地（かちじ）峠などを中心に多くの人々が通ったものだ。

だがそれは、軍勢が通過する道でもあった。おかげで村が戦場となったこともある。例えば天正14（1586）年、豊後に侵攻した薩摩の島津勢がこの村から吹原峠を経て佐伯に入っており、赤木地区で戦っている。

明治 10(1877) 年には西南戦争。西郷軍の一隊がこの村にも入って駐留、横川などで村民を徴発した。



やがて政府軍の追撃が始まると、上直見や赤木で激戦が展開され、特に陸地峠の争奪をめぐる攻防戦はすさまじいものだった。

■ 古塔の里、赤木地区

戦火に見舞われることはあったが、往来する人々はこの地に文化の種もまいていった。古塔の里、と言われる赤木地区の石造物群がその代表的なものではあるまいか。

伝承によれば、この地区にはかつて赤木谷七カ寺が繁栄したという。その確実な史料はなくなっているが、いまでも神内、栗林、堂師、野々内、中津留、吹原などにたくさんの中世の石塔が残っている。

石幢、層塔、宝塔、宝篋印塔などがちょっとした山かげや路傍にひっそりとある。まとまって多いのは堂師の浄光庵で、復元されたものだけで30余基。かけたり埋もったりしているものは100基を越えると推定される。

最古の名のあるものは吹原の宝篋印塔で寿永(1182 - 85年)の年号が読みとれる。神内の釈迦堂石幢は天文10(1541)年の銘があり、県文化

財となっている。また野々内の心光庵には正安元(1299)年銘の木造阿弥陀如来像がある。

■ 観光地づくりに力

先に農山村といったが、山がちな地勢で90%を山林が占める。杉や桧(ヒノキ)が多いが、これらの植林は享保(1716 - 36年)のころから佐伯藩の手で始められたといわれ、現在でも直見杉の名で知られる。木炭や紙の製造も奨励され、藩営のかまや御紙番所もあった。シイタケもまた南海部郡の他の町村と同様にいまでもたくさんとれる。一方、田畑の方はわずかに4%。従来は米作中心だったが、近年はタバコや養蚕、畜産など多角経営の導入がはかられている。注目されるのは電照菊の栽培だろう。

問題はやはり過疎。特に山林業では従事者の減少はたいへんな痛手といえる。このため人々を呼び戻すことを課題とした諸施策とあわせて、村民の憩いの場となり外来者にも楽しんでもらう観光地づくりにも取り組む。県南唯一の赤木の鉱泉活用、あるいは近くの「森林公園憩の森」、さらに赤木ダムの釣りなどが古塔の里、とともに浮揚するだろう。N

<メモ>

周囲にある名所旧跡等
(駅からのおよその距離)

- ◇釈迦堂石幢(直川駅から0.7キロ)
- ◇堂師古塔群(同2キロ)
- ◇心光庵(同2.5キロ)
- ◇赤木鉱泉・森林公園憩の森(同3キロ)
- ◇赤木ダム(同4.5キロ)
- ◇吹原古塔群(同4.5キロ)
- ◇黒沢地藏尊(弘法大師が立ち寄ったのを記念して創建という伝説。参拝者がたいへん多い。同7.5キロ)

④2 重岡・宗太郎

大分と宮崎の県境

重岡駅開業：大正 11
(1922) 年 3 月 26 日

宗太郎駅開業：昭和 22
(1947) 年 3 月 16 日

■けわしい山に囲まれ

～山がたこうち（高くて）在所が見えんヨイヨイ、
在所かわいや山憎や、アヨーイヨーイヨー

子守奉公に出された娘が、その哀しみとうっぷん
を歌に託した「宇目の唄げんか」～あん子面（面）
見よ…で始まる娘たちのかけあいは、奉公のつらさ
を知らぬ今の若い世代にもよく歌われている。その
一節に～山が高うち…がある。宇目町はその歌詞通
り、周りをけわしい山々に囲まれ、林野が 93% と
いう緑と清流の農山村である。

宇目の山々は九州山地の一角。この山の連なりが
東九州を北と南、大分県と宮崎県に分ける。

日豊本線も、この山を乗り越えねばならない。宗
太郎峠の険である。トンネルの数の多さが、難関を
物語る。直川駅を出て宇目町に入り重岡駅までに大
小 11、重岡駅～宗太郎駅間に 14、宗太郎駅から県
境を越えて市棚駅までの間に 12。暗がりを抜ける

◀ 県内で最も山深く、緑と清流の藤河内溪谷



と緑と水と鉄橋。そしてまた暗がり。

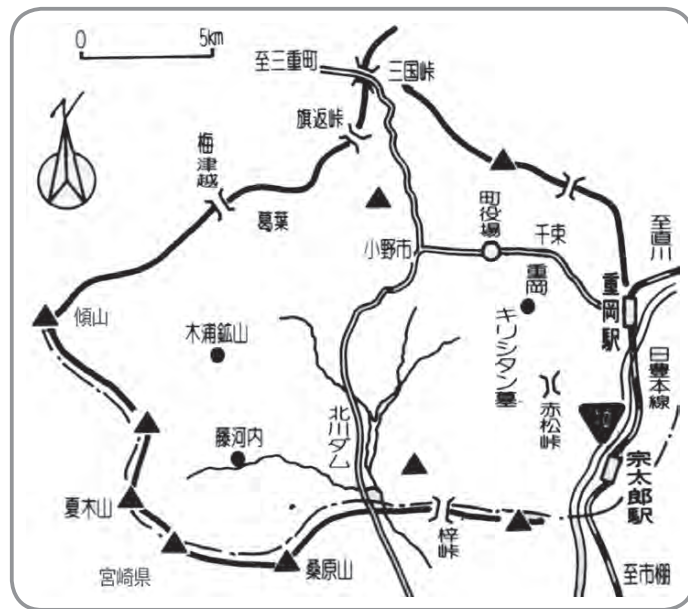
鉄道は宇目町域の東端をかすめるような形で通る。重岡の駅名は開業当時の重岡村によるが、その重岡まで行くには駅から小さな峠を越えて5キロほど。同村と合併して宇目町をつくった小野市村の中心部までは再び峠を越えてさらに6キロ余。

■町内は峠だらけ

合併後、両地区は役場をどこに置くかで長く対立し、議員のリコール運動や町長の辞任など長い間もめた。結局は和解となり、両地区の中間点に位置が決まった。そこが榎峠。役場ができた当時は、周りに人家は全くない状態だった。

とにかく町内は峠だらけである。ちょっと名の通った峠だけで20余。なかでも、大分県と宮崎県を結ぶ主要路の峠としては町北部の三国峠、旗返峠、南部の梓峠、赤松峠が有名である。

これらの峠を通じて、かつての宇目地方は豊後水道沿岸の海部郡よりも、かえって豊肥沿線の大野郡とのつながりが深く、江戸時代は岡藩領で、古代から大野郡に属していたものだ。三国峠の名は、岡領



（宇目町）白杵領（三重町）佐伯領（本匠村）の三国、の境界にあることに由来する。

■日向越えの難所

古代駅制の豊後、日向両国の交通路も宇目を通っ

ていた。三重―小野―長井の各駅のうち、小野駅が現在の宇目町小野市と推定されている。各駅の駅馬は総じて5匹ずつなのに、小野駅だけ10匹を常備していたのも、このあたりが日向越えの難所だったことを示している。

ともあれ、宇目の地は豊後国の南の最前線だった。このため戦火に巻き込まれることが多かった。

例えば、天正14(1586)年秋、薩摩・島津軍の主力となる隊が梓峠から侵攻してくる。このとき、大友氏が守備の頼みとして朝日岳城に置いた柴田紹安は島津に内応、薩軍は難なく宇目を通過し北上したが、翌年春に撤退となると、豊後軍の追撃が始まり村は戦火のちまた。明治に入って西南戦争も村を巻き込んでいる。このときは赤松峠が舞台となった。

■美しい藤河内溪谷

ところで、宇目は行政的には古くから大分県だが、水系からみると宮崎県の子ケ瀬川水系に属し、町内に降る雨のすべては北川となって延岡で海に注ぐ。そのうちの大半を集めて県境近くに設けられているのが北川ダム。電力、洪水調整の多目的ダムである。

また支流の桑原川の上流には溪谷美で知られる藤河内がある。平家落人伝説もあり、県内で最も山深いところのひとつ。源流の原生林はここごろ伐採が進み、問題になりそうである。

中岳川上流には木浦鉦山がある。江戸期には藩の手で経営され、錫(スズ)を中心に鉛、銅、銀を産した。一時は遊郭もできるほどにぎわったもの。昭和32(1957)年に事実上閉山、今はエメリーを採掘しているていど。旧1月11日に行われる奇祭「墨つけ祭り」は面白く、見物人も鍋墨(なべずみ)をつけられ真っ黒。シイタケも名産。長淵川上流の葛葉は豊後シイタケ発祥の地の一つといわれる。緑の山と清い水を生かし、産業の振興と観光の結びつけが町の課題といえよう。



<メモ>

周囲にある名所旧跡等
(駅からのおよその距離)

◇重岡キリシタン墓(県史跡。ゐいさ、の墓とも呼ばれ、十字章、教名、没年月日がそろい、しかも巨大なものは県下でもこれだけ。重岡駅から6キロ)

◇千束楽・八匹原祭典(県文化財、9月下旬。同5キロ)

◇北川ダム(堤防まで同24キロ)

◇藤河内溪谷(同34キロ)

◇木浦鉦山(同24キロ)

デジタルブック版

「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（９）

2007 年 4 月 27 日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学川村研究室

発行 N A N－N A N事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画室内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトでご利用下さい。